

Special Essay



留学生活の思い出

内科学講座 血液内科部門
岡村 孝

最近10年ぶりにアメリカ留学時代のボスと福岡で会食した。お互いの白髪に月日の流れを感じつつ、25年前の留学時代を振り返り、苦労した反面日本では味わえない楽しい3年間であったことをあらためて考え深くしたので個人の回想にすぎないが筆をとってみる。

1982年6月、テキサス州ダラスのダラス・フォートワース空港に一人で降り立った。噂どおり熱かった。ダラスはケネディ大統領が暗殺された所として余りにも有名で、治安が悪いイメージが先行していた。留学決定までの時間があまりにも早かったので準備が十分でなく特に英会話に不安を覚え、またこれからの生活や研究のことなど全く予備知識なく無謀とも思える勢いで留学したのはいいが、実際異国の地に一人いると暑いにもかかわらず、身震いを覚えるほどであった。

当時の日本は、バブルの前で経済状況も良く円がどんどん高くなっていく状況で、自動車や電化製品も日本製の信頼が確立されつつあった時代であった。戦後の卑屈な感情も和らぎ日本人として誇りをもてる状況となり、将来はアメリカにも追いつき追い越す勢いであった。しかし、このうぬぼれも実際にアメリカ社会に住んでみると一挙に吹っ飛んでしまった。広大な土地、異人種を受け入れている度量、膨大なエネルギーの生産と消費、体格、研究費の多さ、すべてにおいてアメリカの底深さを知らされた。戦争でこれだけ悲惨な目に合わされたアメリカに追随してきた戦後日本もこのようなアメリカの偉大さへの憧れからだったのであろう。

研究面においては、幸いなことに私のボスは、ゆっくりと非常にわかりやすい英語を話してくれて研究面での会話には困らなかったが、一般的な会話にはなかなかついていけなかった。研究も当時の分子生物学的手法を用いた蛋白の遺伝子クローニングをさせてもらい毎日がわくわくするような実りある留学生活研究生活がおくれた。この間の外国生活は、貧しい古い長屋を借りて家族4人で過ごした風景がいまでも新鮮に思い出せるし、苦労、努力、緊張の中にも充実した若き日を過ごし、いかなるものにも変えがたい経験ができたと今更ながら思い返した。このアメリカのボスには感謝するばかりである。不思議と苦しいことは忘れ、楽しいことばかり心に残る。これからの若き研究者にも是非この研究留学の醍醐味を味わってもらい、すばらしい思い出を作ってほしいものである。